

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

●大阪大学人間科学研究科人間科学専攻

「人間科学データによる包括的専門教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院生のデータ収集・発表を支援するために「大学院学生データ収集・解析支援基金」を設け、大学院生からの研究計画を公募し、選考の上で優れた計画には経済的な支援を行うとともに、国内外の学会発表も支援した。とくに国際化の中で、海外で英語で発表することが大学院生には求められているが、その対策として、海外で活躍している研究者を招いた「人間科学データ国際比較研究」の授業や国際セミナーによって、英語による研究発表を聞く機会を数多く提供するとともに、「英語による論文作成・発表演習」という授業を設け、英語での発表能力の向上を目指した。また、外国語の発表論文の校正経費を支援した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院生の研究計画を遂行させる上では、指導教員との連絡を取りながら行う一方で、必要なケースでは助教が相談に応じる体制を整え、よりよい研究となるように注意を払った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

学会発表数は200件以上、論文発表数でも150件を上回り、事業開始前の平成18年度を上回った。海外での学会発表数ももっとも成果がみられた平成20年度は40件と以前に比べて一段と件数が増加した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

③積極的な情報提供体制の確立

《人社系》

●大阪大学人間科学研究科人間科学専攻

「人間科学データによる包括的専門教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

データ分析教育のコンテンツを、社会調査データアーカイブ SRDQ (<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp/>) と連動させたホームページ (<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp/book/index.html>) と教科書(川端亮編『データアーカイブ SRDQ で学ぶ社会調査の計量分析』ミネルヴァ書房、2010年)で公開した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

教科書においては、架空データではなく、実際に社会から、人間の行動から得られたデータを用いてデータ分析を学ぶことが効果的であると考え、過去の優れた研究から教育に適した例を探して取り上げたこと、また統計手法の説明だけでなく、その研究の学術的に優れている点を解説し、学術研究の中でどのように統計手法を用いるのかがわかるようにしたこと、そしてその上でその優れた研究例で用いられた社会調査データを用いて、それをなぞらえながら実際に分析し、計量分析についての理解を深めることができるようにしたこと。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

昨今の大学、大学院教育においては、予習や復習を含めた授業時間外の学習時間を確保し、学生の主体的な学習を促して、十分な学習時間を確保する単位の実質化が目指されているが、データ分析の教育において単位の実質化を実現するためには、学生が常時、高価な統計のソフトウェアがインストールされたパソコンが利用できる環境を実現する必要があるが、その情報環境が整わないと、学生に予習、復習を授業時間外に行うことを求めることは難しいのが実状であった。本事業がその成果として作成した教科書『データアーカイブ SRDQ で学ぶ社会調査の計量分析』を用いれば、自宅にインターネット・エクスプローラーなどのブラウザの入ったパソコンとインターネットに接続できる環境があれば学生は自宅でも予習を行ったり、課題を行うことができる。つまり、講義時間以外の予習、復習できる情報環境がコストをかけずに実現でき、実際に教育の効果も高まった。